

サセックスサロン 2018年度第一回

「ホンジュラスの小規模起業支援プロジェクト

にみる人々のエンパワーメント」

講師：黒田史穂子さん

MA Gender and Development:2002-2003 IDS

9月29日（土）、黒田史穂子さんをお招きして2018年度第1回サセックスサロンを開催し、新旧11人の卒業生が参加しました。

国際協力の道に進まれるきっかけとなったお祖母様とのお話やこれまで現地で人々に寄り添って活動されてきたエピソードを、写真を交えてお話いただき、大変楽しい時間を過ごしました。

黒田さんは、修士課程を始められる前に、チリで青年海外協力隊として活動されました。現地では市役所職員として女性の現金収入アップを目的としたプロジェクトを実施されました。

当時、全人口の約90%がカトリック国で離婚が認められていなかったチリの農村部では、世帯内での女性の立場が弱いこともあり、プロジェクトが開始された当初は、外出することにすら抵抗感のある女性やその家族が多く、また就学年数が少ないことから参加者がグループ活動に不慣れだったり、自信が持てないなどの理由から徐々に参加者が減ってきたりとお苦勞も多かったようですが、お宅を訪問して個別に合意を取り付けることでプロジェクトを推進されたそうです。



一方、プロジェクトの研修や小規模事業の活動の中で女性たちが自信をつけ、家族やコミュニティ内での関係性にも変化が起こっていた事象について、アカデミックな観点から学びたいと考えられ、IDS Gender and Developmentに進学されました。修士課程修了後は、JICAが実施していた「ホンジュラス地方女性のための小規模起業支援プロジェクト」に長期専門家として派遣されました。プロジェクトは、コミュニー調

査、市場調査などに基づいて、女性のグループ組織化から、起業のためのさまざまな研修実施、きめ細かなフォローアップを行い、地方女性の小規模事業を支援することを目的としており、首都から400km（車で7時間以上）離れたコパン県を拠点にコパン県、レンピーラ県の2県で活動されたそうです。マヤ遺跡のあるコパン県では、観光客を対象にした企業、レンピーラ県は農業を中心とした企業と様々なグループが設立され、各分野に合わせ短期専門家も派遣されたそうです。女性グループが作ったTシャツやお皿、染め物などの商品を持参して下さいましたが、どれも本当に魅力的なお土産として買いたくなるものばかりでした。



その後、女性が活動できる時間や家庭の中での意思決定がどのようにされているのか、起業活動がもたらす参加者たちの意識や行動の変化についても12のエンパワーメント指標を設定しモニタリング調査を実施、その個別インタビューの過程も女性たちの気づきにつながったと分析されていました。特に印象的だったのが、男性と女性にそれぞれの一日のスケジュールを確認した際、女性は男性に比べ一日びっしりのスケジュールで活動しているということでした。

最後に、黒田さんから「プロジェクト対象者（女性たち）が孤立するアプローチは避けその家族やコミュニティなど周囲の理解を得ながら進める」、「女性個人の自立的発展なしにグループとしての自立はない」ということに丁寧に取り組むことが、女性を支援するプロジェクトを成功させる秘訣であるということをお話して頂きました。参加者からたくさんの質問があり2時間では足りないくらいで、懇親会においても引き続き色々な質問が飛び交い盛り上がりました。サセックス大学には様々な分野で活躍されている卒業生が多くいらっしゃるし、また経験を同窓生に共有して頂ける場所があるということは、本当に貴重なことだと思い、サセックス大学の同窓会の一員であることを改めて誇りに思いました。（川幡玲子）

留学フェア開催 in 大阪

大阪では、以下の日程で英国留学フェアが開催されました。

10月17日：SI-UKフェア（会場：グランフロント大阪コンベンションセンター）

10月18日：BE0フェア（会場：ハービスホール）

今回は、サセックス大学から Mr. James Minhas が来阪され、サセックス大学への入学相談に当たられていました。同窓会関西支部の竹村さんと藤森も18日のフェアに駆けつけ、短時間でしたがサセックス大学のブースのお手伝いをさせていただきました。今回は、時間の都合上 Alumni Dinner は開催できませんでしたが、今後とも大学とのコンスタントな交流は継続していきたいと思います。

大阪での留学イベントの規模は年々縮小傾向にあります。留学相談の数自体は大きく減少してはおりませんが、一定のニーズはあるのではないかと感じました。（藤森 梓）



留学フェア開催 in 東京

東京では、10月19日（金）新宿の住友スカイルームで大学フェアが開かれました。16時から始まってはいましたが、最初の一時間程は訪れる人も少なく、日本でのフェアは初めてというジェームズさんと大学の話をしていました。ジェームズさんが見せてくれたiPadで見る空からのサセックスのキャンパスには、イーストスロープのあたりにクレーン車が見え、工事真最中だとわかります。

1970年代、ある日、パークビレッジの隣人が、日本からえらい学生がやってきた、と教えてくれました。空港からタクシーでキャンパスに着き、タクシーからおろした、本がぎっしり詰まったいくつもの段ボール箱を、当時まだ部分的にしか完成していなかったイーストスロープに運ぶ姿が人目を惹いたのでしょ。その学生さんが、2012年まで同窓会会長を務めた伊藤幸雄さんでした。彼の宿舍のまだ真新しいキッチンに、学生達と話すコージーコーナーに。

当時、私には中華系の友人が何人もいましたが、中国本土からの留学生は一人しか見かけたことがありませんでした。ジェームズさんによると、今のサセックスには、145ヶ国からの留学生5千人が学び、そのうち、日本人は90人、中国人は3千人とのこと。それを聞いて、日本からさらに100人、200人の学生がいてもいいのではと思われました。



17時を過ぎると人が徐々に増え、真剣さが伝わってくる熱心な人たちが列を作り始めました。のど飴、パンフレットを渡して立ち話をし、サセックスに決まりそうな学生さんには、オリエンテーションの話を。同窓会の認知度が上がったのはこのオリエンテーションによるところ大です。日本の未来はこのような人達にかかっている、「皆さん、頑張ってください！」と思わず祈りたい気持ちにかられました。

今回感心したのは、ジェームズさんが16時から21時まで一度も自分の持ち場を離れず、仕事を続けたこと。飲み物、間食は取っていたものの、イギリスは確実に変化し続けている、そう感じた貴重な一日でした。（後藤康夫）

同窓生の集い in 東京!

10月21日(日)、東京港区六本木のパブ BrewDog にてサセックス大学(学生リクルート/同窓生連携部 海外チーム日本担当ジェームズ氏)主催で19:00より行われ、サセックス大学同窓生約20名以上の参加者が集い、熱気あふれる懇親会が行われました。

同窓生の中には、サセックス大学が建学された1961年に近い1960年代に日本から留学され開発経済学博士を取得ご卒業後長く国連でご活躍、国連退職後の現在も国際協力に携わっていらっしゃる方、最近サセックス大学の修士課程をご卒業され帰国された方、日本の大学生活の中の1タームだけサセックス大学へ交換留学(VE)なされ現在まだ日本の大学生活の真っ最中の方など幅広い年齢層さまざまな留学形態の方々が集まり、サセックス大学での学生生活や研究内容、ブライトン/ホープの街中の賑わいなどを懐かしみそれぞれに話が弾みました。

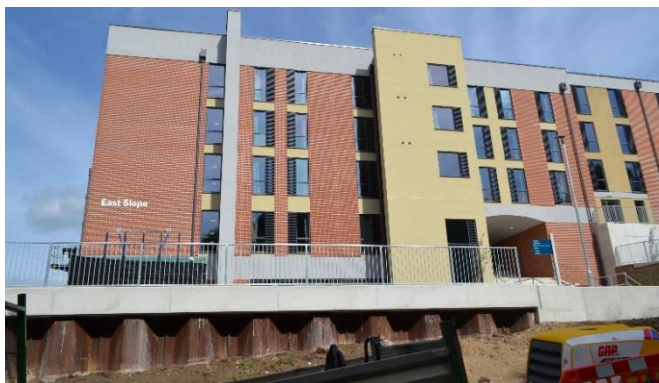


今回ご参加くださった中には、日本に16年滞在されていらっしゃる英国人のサセックス大学同窓生の方も。19世紀英国文学ヘンリージェームズの研究がご専門で英文学博士を取得。現在は教鞭をとっていらっしゃるそうです。科学の分野では、サセックス大学で脳神経科学の研究をなされ博士を取得後現在日本で AI 研究開発のお仕事についていらっしゃる台湾の方が去年に続き今年もご参加下さいました。また、視覚障害を持ちながらサセックス大学へ留学し開発教育修士を取得された同窓生の方も。視覚障害を乗り越えられたご経験を活かし、開発途上国での点字を使った教育などを含めた開発教育を研究なされ現在は JICA の社会保障部門でご活躍とのことです。

参加者みんなでサセックス大学から振舞われた BrewDog の美味しいエスニック料理に舌鼓を打ち、話は尽きず、あっという間に夜10時を過ぎ、それぞれ家路に向かいました。(富田 麻里)

キャンパス訪問

2018年9月、ブライトンに立ち寄る機会があり、サセックス大学のキャンパスを訪問してきました。今回は2年ぶりの訪問となりましたが、キャンパス内ではあちこちでビルの新築や改築が行われており、全体的に明るくまた機能的な雰囲気のキャンパスに生まれ変わっていました。さらに特筆すべきこととしては、オンキャンパスの学生寮として多くの卒業生の方々の思い出に刻まれているであろう East Slope の解体工事が始まっていたことです。なお、由緒ある East Slope の名前は、かつての場所の裏側に新築される寮の名前として引き継がれるとのことです。このように、サセックスの建築ラッシュはまだまだ続きそうです。



新East Slopeの建物

2019年3月のBrexitを控えて、大きく揺れているイギリス社会ですが、もともとリベラルな空気が漂うブライトンの街では、その影響を強く感じることはありませんでした。ただ一つ気になったこととして、ブライトンを含むイギリス全土で、店舗の機械化・自動化が急速に進んでいることが挙げられます。かつては多くの外国人が働いていたスーパーマーケットの会計(レジ)係は、現在は機械に取って替わられています。こうした光景を目の当たりにして、イギリス社会の大きな変化の前兆を感じずにはいられませんでした。



サセックス大学で現在留学されている日本人学生 MA in Social Development 専攻 柏田珠恵さん(左) Undergraduate Business 専攻 菊地祐介さん(右) (藤森梓)

キャンパス便り

高田 祥広 (たかた よしひろ)

MA in Poverty and Development 2019年入学



クラス集合写真、クラスメイトの誕生日会にて

こんにちは。現在 IDS の貧困と開発の修士コースで勉強しております高田と申します。今年の9月中旬から留学生活が始まり、早くも一か月が過ぎようとしております。本寄稿では、留学の背景、現在の勉強の様子、ブライトンの様子等をお話させていただきます。

留学の背景

私は物心ついたころから両親の影響で、世界に貧しい人たちがいてそれはよくないことである、というような価値観を持っていました。そこから大学へ進学し国際政治経済を勉強した後、重電メーカーに勤め、電力というインフラを通して途上国の発展に寄与したいとアフリカ・中東担当として勤務しました。しかしながらメーカーの営業では一般市民の様子に触れることもなかったため、より現場に近い場所で途上国を支援したいと考え、青年海外協力隊としてマダガスカルで2年間活動を行いました。活動は農機具の普及というものでしたが、任地中心部には多くの路上生活者の方々があり、彼らを支援する活動も行っていました。その活動の中で、彼らの様に貧困から抜け出せない人を救うことを仕事にしていきたいと思い、より貧困と開発を理解すべく現在のコースへの留学を決断しました。

現在の勉強の様子

私のコースでは秋学期は必修科目と選択必修科目の2つだけです。それぞれ一週間に講義が2時間ずつ、セミナーが1時間半ずつあります。「貧困と不平等」というコースでは現在「貧困の定義とは?」「何が貧困を貧困たらしめているのか?」ということを学ぶためにさまざまな理論や学術的立場を学んでいます。「開発にお

ける経済学的視点」というコースでは「経済学でいう貧困とは?」「経済と開発の関係性」などを勉強しています。どちらの授業もまだ開始したばかりなので、今は基礎的な部分が多いです。しかしながら、授業準備のために英語で毎週多くのリーディングをこなすことは、長らく英語で勉強をしていなかったためまだつらいです。タームペーパーを書くことも今後あるのですが、そういう経験も薄いので不安が大きいというのが正直なところです。大学や IDS からサポートがあるので、それらを活用し今後は英語での試験という感覚をなくせるように頑張りたいと思います。また授業に加えて、IDS 卒業生や外部講師を招聘しての講演会やセミナーがほぼ毎日開催されています。非常に興味深いものばかりで、できるだけ参加するようにしています。かの著名なロバートチェンバース氏のワークショップも月に1回程度あり、非常に光栄なことだと思いつつも IDS 生の特権に感謝する限りです。

ブライトンの様子

平日はリーディングや課題に追われてあっという間に終わってしまい、ストレスもたまりがちなので、土日のどちらかはリフレッシュするように心がけています。ジムに行ったりクラスメイトや友人と外出、サッカーなどをしたりしています。ブライトンの街は非常にリベラルな雰囲気でも優しく、そして食材や物資的にも困ることがないのでとても過し易いです。マダガスカルにいた時の癖からか、日本の調味料を多く持ってきましたがすべてこちらで手に入ることに驚愕しました。また街にはオシャレなカフェやパブも多く、息抜きするには困りません。加え私自身も自転車で学校に通っていますが、自転車に優しい交通設計になっているのでサイクリングなどもしやすいです。海も街からすぐのところにあるので、友人らと海にいくつろいだりすることも気軽にできます。

今後の試験や論文、そしてキャリア形成に向けて準備をしなければいけないと思うと1年間は非常に短いと思いますが、頂いた機会に感謝し一生懸命がんばりたいと思います!!



友人らとセブンシスターズにて

ALUMNI NOW!

西村 幹子 (にしむらみきこ)

MPhil in Development Studies, IDS 1996年修了
国際基督教大学教授(教育社会学・国際教育開発)、特定非活動法人ジーエルエム・インスティテュート理事



国際協力の実務家を目指して

海外経験も殆どないまま国際協力の実務家を目指していた学部時代、留学準備のために英語のダブルスクールをして、卒業後すぐにサセックス大学の開発学修士課程に進みました。留学してみると国際協力で既に経験のある留学生が多く、語学力に加え背景的な知識や経験も不足して授業についていけず、課題文献は序論と結論を読んで中身は飛ばし読みが当たり前のような学生でした。そんな私が今は大学で教鞭を取っているのですから人生は不思議です。

「意思あるところに道あり」

それから20年、振り返ってみると「意思あるところに道あり」をモットーに気力だけでひたすら走ってきたように思います。留学時代、タイのユニセフのアジア太平洋地域事務所インターンをし、修士号取得後は、当時ロンドンに本部があった国際NGOのアクションエイドに直談判してリサーチインターンとして数ヶ月間雇ってもらい、何とか実務経験を積もうと必死でした。その後、資格要件として「生涯にわたり国際協力に携わる意思を有する者」と書いてあったJICAのジュニア専門員の募集要領に妙に感激して応募し、人的資源開発分野の「専門家」として3年間、本部とウガンダ、ケニアで勤務しました。当時は日本が基礎教育分野のプロジェクトを始めたばかりで人手不足であったこともあり、アフリカでの勤務経験はおろか、国際協力の現場に出たのもほぼ初めてでありながら、日本の教育分野のODAプロジェクトの企画立案のための分析と提案をするという挑戦を与えられました。結果は燦々たるもので、沢山の方々に迷惑をかけ、分析も不十分、まともな提案もできず、挫折感で帰国したのが、皮肉にも今の私の「生涯にわたり国際協力に携わる」原動力になっています。その後、より現場に近いとこ

ろで働きたいという思いから開発コンサルタントになり、アフリカ、アジア、ラテンアメリカを含む14カ国で教育、保健、貧困削減などの分野でセクター分析、調査、プロジェクトの実施、評価に携わりました。時間的、予算的な限りがある中で、途上国の人びとや国際コンサルタントと一緒に何とか結果に結びつける仕事は非常にやりがいがありましたが、どうしてもクライアントを意識しなければならず、自由に提案したり発言したりできないことや自分自身の能力を超える仕事の内容にフラストレーションを感じるようになりました。そしてその限界に挑戦するため、博士課程に進学してアメリカで教育学博士号(EdD)を取得し、アカデミアの世界に仲間入りしました。

大学教員となって

大学に入ってみると、自由に執筆したり発言したりできることで解放感があり、国際協力の実務への関わり方も、政府、JICA、NPO等が主催する懇談会や勉強会等での意見交換やNPOの役職を通じた国際協力に関する政策、実務、研究に対する側面支援に変わり、より広い視野で物事を考える訓練ができました。ただ、今でも限られた時間の中で走り回って情報収集したり、難しい相手と交渉したり、さまざまな国のドナーたちと歓談したり、マラリアに罹りながらも学校訪問を繰返したりした「現場」が恋しいと思うことがあります。

サセックス大学との関係—感慨深いこと

今、サセックス時代を思い起こしながら感慨深いことがいくつかあります。一つ目は、学部のゼミ生を3人、サセックス大学の大学院に送り出したことです。古巣のIDSや教育系大学院に推薦状を書くなどと、20年前の私には考える由もありませんでした。今では私よりよほど優秀な学生たちを送り出すことで、恩返しできているような気持ちになっています。二つ目は、IDSで出会った教授たちの態度から日々の自分の行いを振り返る機会を与えられていることです。経済学の理論の名前にもなっているHans Singer教授の研究室を訪ねたとき、教授の書いた論文を渡され、「コメントを待っていますよ」と言われたときの心の震えが今も忘れられません。学問に対する謙虚さ、学生に対するリスペクト、穏やかな笑顔など、まだまだ私が得られていない要素を思い返しては反省する日々です。最後に、国際協力にさまざまな形で携わる研究者としての姿勢です。IDSにいたとき、イギリス政府からアフリカの女子教育に関する大規模な研究を請け負っていた指導教授が頻りに私のチームペーパーを持ったまま出張に行ってしまう、なかなかフィードバックをもらえないことがありました。当時は腹を立てていましたが、教授が研究者として実務にも関わっていたことが分かり、現場と研究を常に行き来する姿に今の私のロールモデルが重なっています。

ALUMNI NOW!

米倉 雪子 (よねくら ゆきこ)

DPhil. in Development Studies 1999年卒業

MPhil. in Development Studies 1994年卒業

昭和女子大学 国際学部 国際学科 准教授

IDSで学んで

私はサセックス大学開発研究所 (IDS) 修士 (MPhil)・博士 (DPhil) 課程で1992年～1999年に学びました。その間、1995年半年、1997年～1998年は博論フィールド調査と論文執筆のため、カンボジアにいました。博論テーマが “The Emergence of Civil Society in Cambodia: Its Role in the Democratisation Process” で、カンボジアにいた方が、最新情報が得られ、IDSにカンボジア専門家がいなかったことから、カンボジアで草案を書きました。



DPhil 同期。後列左端が筆者

Gordon White 教授から教わったこと

博論は想像以上に大変で、途中で帰国してしまった留学生もいました。私が博論を書き終えられたのは、ひとえに指導教官だった IDS の Gordon White 教授のおかげだと思っています。彼はとても指導が上手で、草案を1章書きたびに、いただくコメントが非常に的確でした。そのアドバイスが道しるべとなり、次の章を書くことができました。Gordon から教わったことは、できるだけ次世代に伝えたい、と日々、考えています。

Gordon が指導教官を引き受けてくださったことは、本当にありがたく、特別なことでした。というのも Gordon は中国の政治が専門だったのですが、不治の病のため、博士課程の院生は論文完成まで命がもたないかもしれない、と受け入れていませんでした。けれども私は Gordon の市民社会と民主化のフレームワークでカンボジアについて博論を書こうと考えていたこともあり、Gordon に「どうしても指導していただかなければ私には博論が書けません」と懸命にお願いしたところ、引き受けてくださったのです。

忘れられない Gordon との思い出はいくつもあります。その一つは、1997年にカンボジア第二首相フンセン氏がクーデターにより第一首相ラナリット王子を駆逐した時、私はカンボジアにいたのですが、Gordon は私の安否確認のため、ある日本 NGO カンボジア事務所のつてをたより、まだ戦闘が続く中、その NGO の方が、私の自宅を探し出し、家まで来てくださったことです。本当に驚きましたし、Gordon のすごさ、あたたかさを感じたできごとでした。またその後、Gordon は亡くなる前に、私が博論を書き終わられるよう、自分の親友で IDS フェローの Robin Luckham 教授に私の指導をお願いして下さっていたのです。Robin はアフリカ政治の専門家でしたが、最後は Robin の指導により、私は博論を終えることができましたのです。



MPhil 同期。Gordon (前列右端)、筆者 (前列左から2番目)

カンボジアでの活動

DPhil 後、私は Oxfam International 日本事務所開設にかかわりましたが、カンボジアで活動したいと考え、2001年～2008年は日本 NGO カンボジア現地代表として有機農業普及や職業訓練事業をカンボジアで運営しました。その間、困窮する人々の生活改善に貢献する活動に関心を強めました。そして2009年～現在まで日本の大学に勤めながら、春と夏にカンボジアを訪れ、有機農業促進を通じて農家の生活改善に貢献するカンボジア NGO・CEDAC と協力して、農家の生計と乳幼児の栄養・健康改善活動を続けてきました。

カンボジアを見守り続けて

こうした中、今年7月末にカンボジア総選挙があり、結果、与党人民党が国会125議席全てを獲得、一党独裁に回帰してしまいました。1993年のUNTAC主導の選挙から、多党制政治と民主化を導入したにもかかわらず、なぜ独裁化したのか、西側諸国の援助効果が問われています。もしGordonがいたら、今の中国、カンボジア、世界について、どんなことを言うだろう、そんな想いをはせながら、これからもカンボジアに関り、活動を続けていけたら、と思っています。

Travelling the world

西 光生 (にし みつき)

MA in Globalization, Business and Development
Institute of Development Studies 2017年修了

UNDP Istanbul International Center for Private Sector in Developmentにて、インターンとして採用された後、国際コンサルタントとして、南米やアフリカにおける民間企業及び慈善団体とのパートナーシップ構築業務に携わる。2018年10月より UNDP Mexico に民間セクター戦略のスペシャリストとして勤務。



イスタンブール：格安航空券と共に

2017年9月、26歳の誕生日を迎えた2日後、修士論文提出以降行くあてもなくただらだと滞在していたケンプタウンのアパートの一室で、私はイスタンブール行きの格安航空券を探していた。UNDP トルコ事務所でのインターンシップに参加するためだ。結局、インターンシップの途中からコンサルタントとして働き始め、イスタンブールには計1年間滞在するのだが、この時はつゆ知らず。

タルラバシュ地区：煌びやかな街の先で

計45キロを超える二つのスーツケースと共に最初に到着したのは、タクシムスクエア。イスタンブール最大の、新市街の中心地である。スクエアから続く、街で最も繁華なイスティクル通りを、人を掻き分けて進むこと15分。右手に通りを一つ隔てた所が、私がこれから数ヶ月お世話になるであろうフラットが位置する、タルラバシュ地区である。しかし、地区に足を踏み入れ、数歩進んだ所で、なんだか嫌な予感が背筋を冷たく流れる。活気溢れる通りから数分隔てた所なのに、何かがおかしい。隙間なく建つ家屋は崩れかけているし、道全体から生ゴミの匂いが漂う。道に座り混んでいる男たちの目も、なんだか虚ろに見える。西アジアの経済大国、トルコの日常は、観光地から外れればこんなものなのか。翌日、トルコ人の友人との会

話で明らかになったことは、タルラバシュ地区はイスタンブールで最も有名な”Red district”であり、昔は殺人も起こる区域であったこと。現在は DAESH 関連のテロ組織が潜伏しているかもしれないこと。イスタンブールっ子でさえ足を踏み入れない、外国人が住むなんて狂気の沙汰であるということだ。私はなんて馬鹿なのだろう。中心街の目と鼻の先にあつて、家賃が特別安いというたった二つの理由で住処を決め、その結果テロリストとご近所さんになるかもしれないのだ。こうして、私のイスタンブール生活は、オルハン・パムク(トルコ出身のノーベル賞作家)の描く、イスタンブールの貧困と格差を、現実として見せつけられる所から始まった。仕事が忙しくなったことから、結局一ヶ月後にオフィの近くに引っ越すことになるのだが、タルラバシュ地区での一ヶ月間は思っていたよりも断然愉快なものとなった。ここで簡単に歴史を説明すると、この地区は19世紀以降、ギリシャ、アルメニア人が住み着き、移民の商業地域として発展した。1980年代後半のブルバール建設に伴い古い住宅地が取り残され街がスラム化。現在は、トルコ人の貧困層に加え、金銭に困窮したシリア難民やトルコ国内で弾圧されてきたクルド人、それにロマ族が住み着いているという。

もう一つのイスタンブール

では、タルラバシュ地区は本当に危険なのか?初日に、私の重いスーツケースを4階まで運んでくれた、その後よき隣人となる女性は、シリア難民であった。フラットメイトと週末に通った、クルド系のカフェのオーナーはいつも私に2杯目のチャイをサービスしてくれた。毎週日曜に開催されるタルラバシュマーケットでは、アラビア語の飛び交う中、多くの人が私のために通訳を買って出てくれた。出生、民族は違うにせよ、ここでは、私を含め、皆がトルコ国内における”マイノリティ”であり、“弱者”であり、それ故皆が助け合っていた。通り一つ隔てた所に、質素だけれど優しさに溢れた、もう一つのイスタンブールが広がっていた。

タルラバシュ地区に纏わる忘れられない思い出がある。地区の入り口にあるナイトクラブに行った時、クラブ内で流れるエキゾチックな音楽に合わせて、何十人もの男女が“皿”を床に叩きつけて踊っていた。衝撃の光景に言葉を失いつつも、ミニスカートを履いていた私は、必死に皿の破片を避けた。この、皿を床に叩きつけながら踊るのは、ギリシャ人とロマ族の伝統であるという。西洋的な音楽で溢れるイスティクル通りのナイトクラブと比較した時、ここでも、移民による伝統が受け継がれ、生きていることがわかる。

私にとって、イスタンブールは、うるさくて、カラフルで、暖かくて、そして幾重にも重なった現実である。開発ワーカーとして、あるいは人間として、かけがえのない経験をさせてくれたこの街を、私は絶対に忘れない。

緊急支援の現場から

藤原 周平 (ふじわら しゅうへい)

MA in International Education and Development

2018年修了

国連児童基金 子供の保護 インターン



サセックス大学、クラスメイト・先生方と

こんにちは。2017-2018で国際教育と開発コースに在籍していました藤原です。7月下旬から国連児童基金、カメルーン的首都ヤウンデ事務所でインターンをしています。

カメルーンを選んだ背景

私は国際教育と開発コースの修士論文として、教育と紛争の関係について書きました。具体的には、ナイジェリア北東部のボコハラムという武装組織に焦点を当て、彼らがどのような論理で武器を持って立ち上がり、なぜ教育機関を攻撃するのか、そして教育システムはどのような影響を受けているのかについて執筆しました。なお、ボコハラムという言葉は、現地の言語であるハウサ語で「西洋の教育は罪」という意味になります。実際に、ナイジェリア北東部では、ボコハラムによって、学校は、燃やされ、破壊され、又は略奪されるといった攻撃を受けています。さらに、学校の生徒が誘拐される、学校が武器庫として使用されることも起こっています。

このような修士論文のテーマから、紛争と教育の関係について理解を深めることができる国を、インターンを行う場所として選択したいと考えていました。カメルーンの極北州は、ナイジェリア北東部に隣接し、ボコハラムによる被害を受けていて、修士論文との関連性が非常に高かったため選びました。さらに、以前から学んでいたフランス語を使える機会を得ることができるという観点からも最適だと考えました。

インターンでの活動

教育部署への配属は叶いませんでしたが、関連のある子供の保護の部署に配属され、大きく分けて2つのこ

とを担当しています。1つ目は、10の州からなるカーンにおいて、北西州及び南西州のプロジェクト管理のサポートです。北西州及び南西州では、現在、政府と独立運動組織との間で、暴力紛争が起こっており、20万人以上の国内避難民が発生しています。そのような状況下で、国連児童基金は、NGOと共に、紛争の影響を受けている子供達の社会心理的なサポートや随伴者のいない子供及び家族と離散した子供の保護に力を入れて活動しています。具体的な業務としては、プロジェクト計画の策定、プロジェクト実施においてNGOが直面する問題への対応・解決及びNGOからのプロジェクト報告書の管理等を行っています。

2つ目の業務は、北西州及び南西州で起こっている治安に関する出来事を、国際連合安全保安局やACLEDなどの紛争関連情報の共有サービスから得られる情報を用いて、データベース化し、暴力紛争の傾向分析を行っています。例えば、一般市民への暴力件数、誘拐・拉致件数、紛争による死者数、学校への攻撃件数といった様々な指標の地域別の増減分析を行い、紛争がどのような状況にあるのか調査します。さらに、その情報を地図に反映し、視覚化する作業も行いました。これらは、北西州及び南西州の紛争状況を説明する際等に使用されます。

インターンを通して感じたこと

国際機関間や内部のセクター間での連携が限定的であると聞いたことがありましたが、カメルーンにおいては、まさにその通りだと感じました。国連児童基金の内部でも、子供の保護、教育、水と衛生、健康、栄養など様々なセクションがありますが、それぞれのセクションが独立してプロジェクトを行っている、適材適所に全体として最適な援助が行われているのか疑問に感じるものが何度かありました。国際機関間でも、各機関が情報をシェアしないということを耳にしました。機関間やセクター間で効果的なコーディネーションを行えていないことが、国際機関が抱える大きな課題であるという印象です。

今後のキャリアについて

NGOに所属し、緊急人道支援に関わりたいと考えています。インターンの経験を通して、国際機関が行っているプロジェクトを、実際に実施しているのは、NGOや市民団体であることを知りました。これらの組織に属して、現場でのプロジェクト実施に関わることは、より効果のあるプロジェクトの策定・運営・実施を将来リーダーとして導いていく上で必要だと考えるためです。引き続きフランス語などの言語を磨きながら、自分にとって難しく感じることにチャレンジする姿勢を大切に、緊急人道支援や開発援助に少しでも貢献できるように切磋琢磨していこうと思います。何かありましたら、shujkl@gmail.comまでご連絡ください。

Sussex Pub 開催のご案内

日時：12月22日（土）11時30分～14時
会場：シーボニアメンズクラブ@霞が関
<http://www.seabornia.co.jp/mensclub.html>
講師：加藤珠比
トピック：‘Agricultural input subsidies in sub-Saharan Africa - the case of Tanzania’
会費：3,500円
先着15名様
申し込み先は、サセックス大学同窓会HP：
<http://www.usaaj.org/alumni/index>からお申込みください。

Sussex Connectのご案内

サセックス大学では先日、Sussex Connect という同窓生と在校生を繋ぐアプリを新しく導入しました。Sussex Connectのアプリのリンクは以下の通りです。

<http://www.sussex.ac.uk/alumni/getinvolved/volunteer/consuls>

サイト内でフォームを入力すれば、登録される仕組みになっています。

このアプリは在校生が自分の勉強している分野・興味のある場所で働いている同窓生を見つけることができ、アドバイスをもらえる仕組みになっています。同窓生は Mentoring volunteerという形で参加し、在校生と繋がったり、同窓生を探すこともできるようになっています。このプラットフォームは、在校生の視野をもっと広げることが可能とし、将来・大学卒業後についてのアイデアを膨らませたり、明確にできるのを助ける役割を担っています。

担当幹事の募集

ホームページ、サセックスサロン、名簿作成・管理などを今後充実させるため、担当して下さる幹事を募集しています。ご協力いただける方は事務局 (usaajapan@gmail.com) までご連絡ください。

メーリングリスト登録先のご案内

ニューズレターの配信やイベントのご案内をメーリングリスト宛にお送りしています。届かない、周囲の同窓生の方に届いていない等ありましたら、usaajapan@gmail.com (担当：川幡さん) までご連絡ください。

会員からのメッセージ

読者の方から、前号のうれしいご感想をいただいております。以下に紹介します。

“今回の41号は先ほど届き、一部の記事を拝読しました。写真も多く、内容が充実していて素晴らしいです。故・浅沼様のことはたいへん残念でご冥福をお祈りするばかりですが、8月29日に大阪のリーガロイヤルホテルで開催されるお別れの会に竹村様、藤森様らと参列させていただくことにしました。今後ともよろしく願います。”
C. A. さん

“同窓会ニューズレターお届け下さり、謝謝。皆様の世界を視野に入れたご活躍振りを見て、幸甚です。同窓会会長浅沼さんの急逝に深甚なる追悼の意を表させていただきます。” A. I. さん

“今年9月よりサセックス大学にて貧困と開発の修士課程に進学します。是非今後ともニューズレターをいただきたいので、メーリングリストへの登録をお願いできれば幸いです。どうぞ宜しくお願いいたします。” S. さん

編集後記

はじめまして。黒田史穂子さんと交代で今号からニューズレターを担当させていただくことになりました加藤珠比と申します。いたらぬところもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今号もサセックスサロンの様子、英国留学フェアの模様の他、「Alumni Now!」や「Travelling around the world」、「キャンパス訪問・便り」、「緊急支援の現場から」と、たくさんの方からご寄稿いただき、内容の充実したニューズレターをお送りすることができました。ご協力いただいた方、どうもありがとうございました！

編集者：加藤珠比

連絡先： tamahiyama@yahoo.co.jp